「日々の理科」（第 1374 号） 2018（H30）,-4,11

「カラスノエンドウを探究する（２）」

お茶の水女子大学附属小学校教諭
お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員
田中　千尋　Chihiro Tanaka

今回、観察対象として着目した「カラスノエンドウ」（ヤハズエンドウ）は、マメ科の「越年草」である。冬を越した植物体は、春になると一気に花を咲かせ、数日で豆の鞘をつける。この成長の速さからも、かつては食用として栽培されていたらしい。

マメ科の植物は、草本（草花）と木本（樹木）が含まれる。草本の例としてシロツメクサ、木本の例としてフジがあげられる。いずれも、独特の形状の花をつけるのが特徴だ。上写真は、カラスノエンドウの花だが、まるで蝶が飛んでいるように見えることから、「蝶形花」と呼ばれている。

子どもたちには、学校を出発する前に、この植物の観察ポイントをレクチャーしておいた。「つぼみ、咲いている花、咲き終わった花、小さな果実、大きな果実」が、すべて１本の茎で観察できる、という特徴である。大学構内にこの植物は、ほとんど無尽蔵に繁茂しているが、できるだけ上記の特徴をすべて備えた標本を採集するように指導しておいた。

カラスノエンドウを見分けるのは簡単だが、完全な標本を探し出すのはなかなか大変だ。子どもたちは、かなりよく観察しながら、より良いものを時間をかけて探していた。

クラス全員で 20 分ほど探すと、続々と良い標本が発見された。この男児が持っている個体も、ほぼすべてが揃っていて、牧野の図鑑にそのまま載せられそうだ。これを見ると、根元に近いほど成長が進んでいることがわかる。次は持ち帰って、腊葉標本作りだ。